

主論文の要旨

4 型胃癌における TS, DPD, TP, OPRT の mRNA の発現と予後

東京女子医科大学第二外科学教室

(主任：亀岡信悟教授)

橋本 忠通

東女医大誌第84 巻臨時増刊3号 頁E365～E371 平成26 年11月に掲載

【要 旨】

【緒言】 フッ化ピリミジン系抗癌剤は胃癌の中心的薬剤である. その代謝酵素 thymidine synthase (TS), dihydropyrimidine dehydrogenase (DPD), thymidine phosphorylase (TP), orotate phosphoribosyltransferase (OPRT) の発現は治療効果に影響し, 予後因子とも報告されている.

【対象と方法】 4 型胃癌手術 62 症例で腫瘍内の TS, DPD, TP, OPRT を Danenberg Tumor Profile (DTP) 法を用いて mRNA を測定し, 臨床病理学的因子, 及び予後との関連性を検討した.

【結果】 これまで 4 型胃癌では腫瘍成分が少ないため十分測定できなかったが, DTP 法を用いることで 92.5% の症例で測定できた. 各酵素の mRNA と予後を検討すると TS, DPD, OPRT で差を認めなかったが, TP では 3 年生存率が高値群 19%, 低値群 40% になり TP mRNA 高値群にて予後が有意に不良であった. 予後について各酵素値と病理因子 (組織型, リンパ節転移, リンパ管侵襲, 静脈侵襲, 漿膜浸潤の有無) にて多変量解析を行った. TP mRNA は Hazard rate が 1.4891 で, リンパ管侵襲, 静脈侵襲, 漿膜浸潤の有無とともに有意な因子であった.

【結論】 TP mRNA は独立した予後因子であり, 予後判定の指標となりうることを示唆された.